

失われた兵士たち

戦争文学試論

野呂邦暢



芙蓉書房

著者略歴

昭和12年長崎県生まれ。長崎県立諫早高校卒。

本名 納所邦暢

「或る男の故郷」にて第21回文学界新人賞佳作。

表題作「草のつるぎ」(第一部)にて第70回芥川賞受賞。

〈著 書〉 十一月 水晶(冬樹社刊)

海辺の広い庭(文藝春秋刊)

鳥たちの河口(文藝春秋刊)

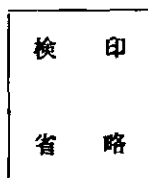
草のつるぎ(文藝春秋刊)

〈現住所〉 長崎県諫早市仲沖町 658 (〒854)

失われた兵士たち

—戦争文学試論—

昭和52年 8 月30日 第一刷発行



禁無断転載

著 者 野 呂 邦 暢

発行者 上 法 快 男

発行所 株式会社 芙蓉書房

東京都千代田区神田須田町1-28

電話 東京 (03)252-7376(代表)

落丁・乱丁本はおとりかえします。

振替 口座 東京 8-104799

印刷 三晃印刷(株), 写真製版 株興陽社, 製本 佐久間製本(株)

0095-010191-7344

©1977 K Noro printed in Japan

野の
呂ろ
邦くに
暢のよ

失われた兵士たち

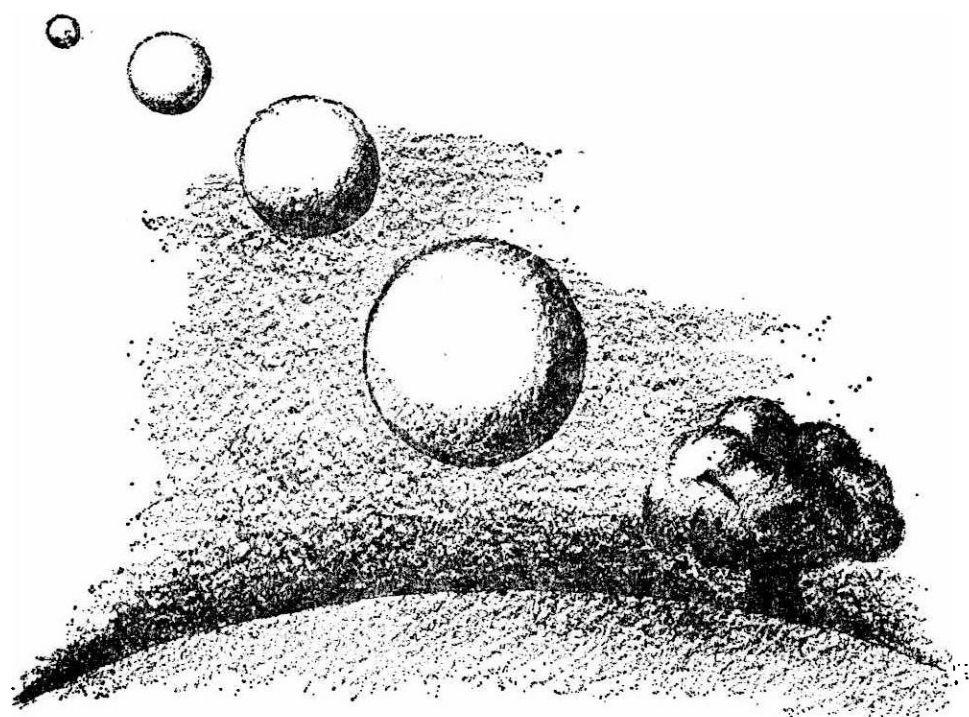
—戦争文学試論—

失われた兵士たち／目次

はじめに	5
一 敗者が得たもの	17
二 虚実	29
三 さすらい兵士たち	41
四 巨大な陰惨	53
五 生者と死者と	65
六 河辺の無名兵士たち	77
七 海の光	89
八 勝利者と敗者と	101
九 栄光	113
一〇 象徴	125

一一	軍艦大和	137
一二	昔も今も	149
一三	丘	161
一四	もうひとつのテルモピレ	175
一五	檻の中	187
一六	島・孤立・抵抗	199
一七	洞穴とクリ舟	211
一八	漂泊と帰還	223
一九	審判	235
二〇	闘争	249
二一	崩壊	261
二二	滅亡と救済	273
	おわりに	285
	あとがき	297
	参考文献	301

は
じ
め
に



その日、私は公園へ友達を誘って蟬とりに出かけた。空はよく晴れていたと思う。めずらしく空襲もなかった。私たちが歩いている方向に城址のある公園台地がそびえている。視線のおよそ三十度ほどの高さに対空監視哨のある楠の巨木があった。

おかしいものが突然、木の上に現われた。白っぽい光の球である。太陽のように見えたが太陽のはずではなかった。太陽は私たちの頭上に輝いていた。しばらくして鈍い爆発音が地をゆるがして伝わって来た。私たちはもよりの防空壕にとびこんで、光球の正体について話した。単なる爆撃には馴れっこになっていたから、敵機が月並な爆弾を落したのでないことは察しがついた。

やがてどす黒い煙の塔が立ちのぼった。

私は町はずれの丘へ駆けて行って西南の方を眺めた。黒褐色の煙の下際は赤い焰で縁どられていた。煙の下にはそこで私が生まれ七年間を過した家と長崎の市街があった。そこから二十四キロ北東に位置する諫早へ疎開して半年あまり経っていた。昭和二十年八月九日の夜はいつもより早く訪れた。煙がくまなく空を覆い光をさえぎった。太陽は光を失いちっぽけな真鍮の円板にすぎなくなった。長崎の方から生臭い風にのって布切れや紙の燃

え殻があとからあとから漂って来た。空はこれらの黒っぽい滓状のもので埋めつくされた。不吉な夕焼けがひろがった。それは一つの都市が炎上する色でもあり、一つの帝国が瓦解する光でもあった。血を流したように濃い華麗な夕映えが西空を染めた。私たちは声もなく立ちつくして赤い光を見つめた。

夜が始まるとき、災厄の街から傷ついた人々が列車で運ばれて来た。彼らは諫早駅前の広場に並べられた。病院に収容できなかったからである。結局、収容する必要はなかった。大半が席の上で手当を待つうちに息を引きとったから。諫早市近郊の丘にも火が点じられた。火葬場で処理しきれない死者を丘に穴を掘って薪で焼くのである。それゆえこの日から八月十五日に至る一週間の出来事は私の記憶の世界において常に火と煙と死者たちの影像をともなつて立ち現われる。

諫早には海軍の飛行場があった。ポツダム宣言が公表された日、ここから飛び立った複葉機が諫早上空を乱舞した。飛行練習生たちは十代の少年であったから敗戦を受入れることは自己の生存の拠り所を否定することでもあった。動揺が世の大人よりも激しかったのは当然である。諫早の北にある大村市の海軍航空隊も黙っていないか

った。徹底抗戦を呼びかけるビラを戦闘機で散布したのは彼らである。ちなみに日中戦争の初期に海軍の渡洋爆撃隊が大陸へ向って離陸したのはここ大村の飛行場からであった。

諫早には陸軍の数個大隊が駐屯していた。本土決戦に備えるためである。地図を見れば明らかのようにこの町は四つの鉄道が交叉する交通の要地なのである。

私の小学校も兵隊の宿舎にあてられた。装備は子供の目にもお粗末であった。山頂にすえつけられた高射砲は木造で、本物は旧式の山砲が二、三门あるきりであった。一個大隊に重機が一挺、小銃は全員にゆきわたらず、銃剣の鞘は竹で、飯盒は柳の枝を編んだ函状のものに変わっていた。

「兵隊さんは毎日赤飯を食べている」と私は聞いた。

寺院に分宿した一隊が小川で小豆を洗っているのを住民が見たそうである。小豆と見たのは実は高粱ゴイロヤンであった。見かけがそっくりなのである。兵士たちは本来なら家畜の餌にあてられる穀物を食べていたのだった。

兵士たちは皆四十前後の年配であった。本土決戦のために大急ぎで編成された老兵たちの集団である。妻子を郷里に残してロクな武器も与えられず激しい訓練に明け

暮れていた彼らの内心は明るいものではなかったであろう。今も私は校庭の一角にたたずんでいた将校の暗い表情を思い出す。敗戦を確実に予測していたのは住民や下級兵士ではなく軍の内情にいくらか通じていた高級将校たちであったと思う。

戦争は終わった。

兵士たちが故郷に帰って来た。私の父も復員した。

彼は鹿児島、宮崎海岸に築かれた水際陣地に北九州から物資を輸送する列車の護衛に任じられた。列車に高射機関砲を積んだ一両を連結してグラマンの機銃掃射とわたりあうのである。すでに事態はそこまで来ていた。

昭和二十年に入ると日本の内海航路は機雷で封鎖され、列車も安全に運行しにくくなっていった。

従兄がインドから帰って来たときには留守家族は幽霊ではないかと疑った。彼はインパール撤退の後衛戦で咽を射抜かれて人事不省の状態で英軍の捕虜となりインドに送られたのだった。

親類の一人はフィリピンから帰って来た。「弾はあったとばってん砲がなかとたい。まず、喰い物が何もありやせん」というのが第一声であった。彼は砲兵としてル

ソン島で戦った。

ニューギニアから中国から南洋の島々からシベリアからこのようにして男たちは復員して来た。私の周辺ではどの家庭からでもすくなくとも一人は軍隊にとられていた。留守家族においても十代の男女は軍需工場で働いた。

ここに一つの統計がある。敗戦時の動員数である。

(昭和二十一年版朝日年鑑による)

陸軍 五、八九〇、〇〇〇人

海軍 一、五五〇、〇〇〇人

この他に戦争遂行上必要な産業に従事しつつある者として、

被徴用 六、一六四、一五六人

学徒 一、九二七、三七九人

女子挺身隊 四七二、五七三人

朝鮮人 三三二、八九〇人

中国人 三四、〇〇〇人

一般従業員(鉱工交) 四、一八三、二七一人

民間と軍関係をあわせて約二千万人の日本人が戦っていたことになる。当時の人口はおよそ八千万人であるから戦闘員非戦闘員を問わず四人に一人は戦争に組みこまれていたわけである。

帰って来た親類たちは私の家に顔を出してこもごも戦いの実相を語った。私は父の傍で帰還兵士が物語る苦勞話に耳を傾けた。そのとき初めて私は新聞雑誌に伝えられた類型的な戦争と異なる戦争のあったことを知った。その頃私は八歳であった。まずそれは敵よりも飢えとマラリアとの戦いであり、とほしい兵器弾薬をもつてする言語に絶する苦闘の連続であった。話の途中でしばしば明りが消えた。昭和二十一、二年は電力も枯渇していたのである。闇の底で元兵士は密林での逃避行や飢えのすさまじさを口ごもりつつ語った。だから私は日本人の戦記を読むと、不意に訪れるあの頃の黒暗々たる闇の色と、その奥でつぶやく敗兵の声をききまわって思い出す。

彼は眼が落ちくぼみ顔は肉が削げて骨に皮を張ったも同然であった。頭髮は栄養失調のために赤茶けていた。彼が内地へ帰れたのは、あと数センチ弾丸がそれていたから、魚雷が不発でなかったら、爆弾がもう一メートル近くに落ちていたら……そういう「もし」と偶然のたまも

のであった。つまり一人の生還者の背後にはおびただしい死者たちが存在していたのである。ふたたび統計を引くことにする。第二次大戦における日本人死傷者の数である。

死者（陸海軍）	一、一七四、四七四人
負傷者（陸海軍）	四、六一六、〇〇〇人
行方不明	一、四八三人
一般市民の死者	六七二、〇〇〇人

（日本資本主義講座第一巻による）

明治三十八年生まれの父は、大多数の庶民がそうであったように素朴に日本の正義を信じていた。世界の強国を向こうにまわして完全勝利は難しいとしても、よもや完膚なきまでに叩きのめされることはあるまいと思いつていたようだ。

一國の英知を結集した指導者階級がまけると決った戦（いくさ）を始めるはずはないと父は考えていたから敗戦のショックは大きかった。いや、敗戦そのものより戦後の思想的変化が父をより強く打ちのめしたふしがある。「真相」という言葉が流行った。それによれば軍人がどんなに残酷

行為をほしきままにしたか、大本營発表がいかに戦果を水増ししたか、政治家がいかに愚昧であったか、日本人はアジアの解放者でなく掠奪者であった、ということになっていた。

私たちは二の句がつげなかった。同じ新聞とは思えなかった。これがきのうまで神州不滅を叫び、聖戦の遂行を至上命令としたジャーナリストの言葉だろうか。特攻の青年を神とたたえた人々は八月十五日を境に彼らを犬死にした無知な被害者ときめつけた。「鬼畜米英」は今やほめたたえるべき解放者となった。

私たちは教科書に墨を塗った。教師たちは天皇の「御真影」をおさめた奉安殿をつるはしでこわした。かつてそれに対する敬礼を忘れた生徒を殴りとばした教師が最も熱心につるはしを振り回しているのを私は見た。進駐して来た米軍兵士に片言の英語で阿諛したのも彼であった。変り身のはやさは何もジャーナリストに限っていたのではない。これが私の戦後である。

日本人とは何者だろうか。

文学が人間を追求するものであるとすれば、一人の小説家である私は、日本人とは、という問いに答えること

ができなければならない。これが戦争文学について考えてみたいと思いついたゆえんである。先にながながと少年時の見聞を書きつらねたのは、当時の体験をヌキにして戦争そのものを単なる歴史的現象であるかのように語るつもりのないことを初めに断っておきたかったからである。

これから述べる私の文章は右のような原体験が色濃く投影したものとなるだろう。そして私はこの小文で何事かを証明するつもりもない。戦争という異常な極限状況において日本人が何を考え、何をしたかということを当事者の手記をもとにたどることが私の目的である。そこからなんらかの結論を引出すのは読者にゆだねたい。

固苦しい文学評論とはちがって私は、つとめて気ままに文献を渉猟するつもりである。さしあたって戦争文学の定義をしておこう。ここでとりあげる戦争文学とは、今次大戦で戦争に参加した日本人が、戦争について書きしるした文章のことである。狭い意味の「文学」にはとらわれないことにする。これまで多くの人が、戦争文学論を発表してきた。それはどちらかといえば、文学者の作品に偏していたと思う。扱われる作品も一定していて、戦争文学の名のもとに一括される作品はほぼ次のような

ものである。括弧内は私がつけた作品の舞台である。

(順不同)

- 一、桜島(鹿児島) 梅崎春生
- 二、俘虜記(ミンドロ島) 大岡昇平
- 三、出発は遂に訪れず(奄美大島) 島尾敏雄
- 四、真空地帯(大阪) 野間 宏
- 五、夏の花(広島) 原 民喜
- 六、遁走(北満) 安岡章太郎
- 七、生きている兵隊(中国) 石川達三
- 八、極光のもとに(シベリア) 高杉一郎
- 九、遙拝隊長(内地) 井伏鱒二
- 十、戦艦大和の最期(鹿児島沖) 吉田 満

十冊のうち六冊は内地かその近傍である。実戦にのぞんだ描写は二、七、十に見られるが、二は捉えられるまでの経過が主であり、七は従軍作家の傍観的感想であるから、十冊のうち本当に戦記といえるのは十しかない。他は後方の兵営、捕虜収容所での生活と被災が書かれている。注目すべきは著者がほとんど最高の教育を受けていることである。東大が二人、京大が二人、九大が一人、

慶大が二人、早大が二人、高等師範(教育大)が一人ということになる。大学卒業者がきわめて少なかった当時としては高い割合であるといえる。書かれた文章の背後には戦争を批判することのできる教養があった。全部とはいわないまでも著者たちは一般民衆より広い歴史的視野を持っていたことが予想される。これらの人々は選ばれた少数者であった。例外者であった。

大多数の兵士は、私の父がそうであったように戦争目的について疑いを持たなかったと思う。だとすれば戦争文学のリストには、日本人の遺産としてつけ加えられるべき書物がまだ多くあるのではないだろうか。果して私たちの父兄は、未曾有の大戦に直面してたったこれだけしか経験の総和を残さなかったのであろうか。

十人のうち病死した梅崎春生、自殺した原民喜を除いた八人を見ると、今も文壇で活躍している職業的文学者がほとんどである。そのなかで戦闘員としての体験を描いているのは三篇にとどまる。

『俘虜記』の骨子は眼前に迎えたアメリカ兵を射つべきか否か遲疑したためらう所にある。私たちが持っている戦争文学の最高傑作がいに一発の弾丸も撃たないで終ることは興味深いことである。

「出発は遂に訪れず」にしても特攻要員である主人公が震洋艇の出撃間際に敗戦を知った動揺が主題になっている。

「戦艦大和の最期」には弾丸雨飛する戦いの描写があるけれど、これとて閉じこめられた艦内における戦闘の観戦といえなくもない。私たちの戦争文学はまだ戦の実相と「敵」を描いていない。そして文学の場合、実はそれでもいいのである。戦争は講談でも劇画でもないのだから、兵営でも捕虜収容所でもそこに生きている人間像を完全にとらえていたら戦争文学といえる。しかし、右にあげた十冊の他に、戦争について書かれた莫大な数にのぼる記録がある。文学の域にまで高められていないという理由で軽んじられ話題にもならず忘れ去られた書物の一群がある。私がとりあげるのはそのような本である。兵士として戦場へおもむいたのは高い教育をうけた文学者ばかりではなかった。

農夫、漁師、会社員、教師、神官、炭屋、理髪師、学生、船員、タクシー運転手、鉾夫、肉屋、仕立屋、樵夫等あらゆる階層の人間がいたのである。作家はそのうちのひとつまみにすぎない。

私がこれから取りあげる戦争文学においては、芸術と

しての密度や文学的完成度は二の次である。時間的には日中戦争から太平洋戦争の終結までとする。空間的には戦争の舞台となった全域を含む。北はシベリアから南はオーストラリア、東はアメリカ、西は中央アジアまで日本人は足跡をしるしている。有史以来これほど広い範囲にこれほど多くの日本人がばらまかれたことはかつてなかった。文学者の作品を必ずしも排除しはしないが、それらはこれ迄しぼしぼとけられて来たから、世人の耳目をひかなかった文章、すなわち九死に一生を得て帰って来た無名の人々が、有名になろうとかひと儲けしようとかいう下心なしで、家業の合間にこれだけは子孫に伝えたいと心血を注いで書き綴った文章を中心にこの小文を進めて行きたい。

この人たちは大部分が二十代の初めに生と死の極限状況に直面している。激烈な経験というものは魂の奥深く刻みこまれ、やがて表現されることを待っているのである。

あれは昭和三十六年か七年の夏であったと思う。テレビは太平洋戦争を回顧する番組を放送していた。海軍予備学生として特攻に参加し、昭和二十年初夏、沖縄海域

の連合軍艦艇に突入するために九州を飛び立ってから、計器の故障で針路をあやまり、沖繩に達せず無人島に不時着して生き残った人が画面に登場していた。

その人には僚友を死地に送り自分のみ生き永らえたことが、計器の故障という理由があったにせよ耐え難い罪障感となって、心の底深くわだかまっているらしく見えた。もはやその人にとっては、戦争の勝敗は問題とするに足りないのである。戦争の真の終りは彼に死が訪れるときであろう。その日まで彼は、誰ともわかちあうことのできない悲痛な思いを抱いて生きなければならぬ。元パイロットが語り終ってから画面は新宿らしい街頭風景にかわり、アナウンサーがそこを往来する学生らしい男女にインタビュした。

「特攻？ 興味ないな、死ぬのが厭なら厭だといって命令を拒否すればいいのに」

と男の子がいえば、別の女の子は、

「団結してさあ、反抗したらよかったのよ、ばかみたい」

となげやりにいった。

私は歳月の経過を思わないわけにはゆかなかった。十六、七年のうちに日本人は戦争を理解できなくなってい

るのである。このような感想を口にする世代はこれからも増えてゆくにちがいない。

「戦争が悪だということはきまつてゐるから心ある人間ならどうして戦時ちゆうに反戦運動をやらなかったのか」

という青年も多い。「坂の上の雲」の著者はこのような連中を一種の白痴か精神薄弱児ではないかと思う、とどこかに書いていた。一つの時代を後世の価値観で裁くことは、私たちがおちいり易い錯誤である。国家に殉じることが、最高の名誉とされた時代もあったのである。反戦を叫ぶ現代の日本人が一時代前に戦って死んだ人々よりもすぐれていることにはならない。

私はこの小文を書くために戦争文献を読んだのではない。個人的な関心のままに十数年、おりにふれて読んできた書物をあらためて振り返ってみるだけである。手許から散逸した本は記憶をたよりにするほかはない。遠い友人に貸して戻らない本もある。それでも身边にあるのは十数年蒐集したかいもあって五百冊をこえる。本の体裁もさまざまである。自費出版した書物がある。孔版印刷のパンフレットがあるかと思えば、函入り布表紙B六判の堂々とした書物がある。外見は種々雑多であるが、

中身は作者にとってかけがえのない経験である。無量の思いといってもいいであろう。表現の巧拙は問わない。

数ある本には興味本位に書かれた読物や嘘八百で固められたベストセラーめあての文章もある。虚偽ははっきりしておこう。木の葉と同じで時がたてば枯れ落ち、真実という幹だけが残る。

最近、刊行された文献では（昭和四十九年四月図書出版社）奥村明著「セレベス戦記」が一番あたらしい。ハルマヘラからセレベスへ一小隊長として転戦した陸軍少尉の手記である。奥付に紹介された略歴によれば作者は現在、大阪にある建設会社の顧問という。はなばなしの戦闘描写は一行もない。大戦末期、セレベス島を南から北へ数百キロ歩いただけの記録である。地味すぎるほど地味な従軍記であるために、派手な戦記なら争って刊行する出版社がこれには尻ごみして、今まで世に出ることがなかったのであろう。次にかかげるのは本書の一節である。

「物量と機動力を必要とする近代戦のなかで、私たちは完全軍装の行軍という日露戦争以来の訓練にモノをいわせるしかないのであった。兵士たちの本当の苦痛は、は

なばなしの銃撃戦や白兵戦にだけあるのではなくて、長いが無意味なほどの消耗に耐えることでもあった。

武勲も立てずに命令のまにまに転戦しつづけ、み知らぬ土地でわけもわからないままに死に絶えても永遠に沈黙をまもり、それはそれなりに歴史から葬られてしまう。この運命に耐えるだけが多くの兵士たちの「戦争」の実に外なるまい。私たちは爆撃にも行軍にも、この不断のくりかえしに我慢ならず、耐えることによって生をたしかめるしかない状態であったが、命令にそむいたり脱落しようとは思わなかった。目的地に行きさえすれば何が待っている。いくら失望しても、ふたたび希望を抱いて立ちあがろうとした。そして、この場におよんでも日本がまけるということは誰一人信じていなかったであらう。」

戦争に対するインテリ将校の考え方がよくまとめられているように思われる。

類型化ということは対象の特徴をとらえやすいが本質をゆがめてしまう。ゆがめるだけならまだしも、まるっきり別なものを創り出してしまふことがある。

戦後、おびただしく刊行された戦争小説、戦記、映画、